

## テレビ番組「ミツコ」をどう考えるか

盛田 常夫

TV2 が三月の新番組編成で目玉番組として宣伝した「Micukó」が争点になっている。大使館が四月七日に番組内容にたいする抗議文を出したのに続き、日本人会も五月一六日にTV2 に抗議文を送ると同時に、国会付属の番組監視委員会である ORTT たいして、番組の中止を求める要請書を送付した。

### どんな番組か

TV2 のスター、シュタール・ユーディットが日本のテレビ局のレポーターと称して、ハンガリーの有名人（テレビ・スター）をインタビューし、なんとも形容しがたい奇妙なハンガリー語で、不躰で意味不明瞭な質問を繰り返し、ゲストを困らせるという番組である。この番組の売り物の一つは、シュタール・ユーディットの変装であり演技である。長い髪の毛に黒縁の分厚いメガネをかけ、出っ歯で変装している。シュタールが芸能人を騙すドッキリ番組だ。この種のテレビスター同士が遊ぶ馬鹿騒ぎ番組は日本にも多い。

### 視聴者の反応

こんなレベルの低い番組にいきり立つ必要はないという意見は多い。抗議すれば、日本人はユーモアが分からない民族だと馬鹿にされるという人もいる。他方、日本に関係しているハンガリー人や、日本語を学んでいるハンガリー人の多くは、番組に嫌悪感を抱いている。日本人が見て、気持ちよい番組でないことだけは確かだ。

私自身は別の視点から、この番組に失望した。シュタール家とは一五年の付き合いがあり、ユーディットが洋菓子専門学校に通っていた時から知っている。そのユーディットが日本を扱う番組を制作したというので、興味を持って見たが、あまりの馬鹿らしさにチャンネルを変えてしまった。誇張した変装も気になったが、インタビューの中身がまるで面白くない。外見が悪くても、会話に面白さがあれば、最後まで見ることができる。ところが、会話に中身がない。ただのドッキリカメラ番組だ。会話に内容がないと、今度は逆に、彼女の変装が気になってくる。出っ歯で奇妙な容姿のハンガリー語ができない「日本人レポーター」という設定はどうやって作られたのか。それが気になって仕方がなかった。

たとえば、「ミツコ」が突然に「貴女の家は畳何枚か」と聞く。ゲストは「いったいそれは何だ」と聞き返す。「日本では、畳の枚数で広さを測る」と繰り返す。「それはベットが何台入るかということと同じか」と尋ねるが、「そんな計算したことないから分からないわ」と言って、このテーマはこれで終わり。この種の会話が続く。

この場合、もし「畳二枚が一坪で、ハンガリーの negyszögöl と同じなんだ」という会話になれば、「あ、なるほど日本でも同じような単位で面積を測るんだ」ということで、少しは賢くなれる。が、この番組にはそのような知的な内容や話題の発展性がゼロなのだ。

いろいろ知人に聞いてみたが、案の定、まず知識人はこの番組を知らない。見たことの

ある者は全員、つまらないからチャンネルを変えたという。それでは誰が見ているのか。この番組を毎回、最後まで見続ける人は、余暇暇な人か、芸能番組に熱中する若者だろう。つまり、年金生活者とオツムの良くない若者だ。実際、TV2 の期待に反して、この番組は人気上位二位には入っていない。

### テレビの社会的影響

テレビ番組の社会的影響は大きい。まずこの番組を見ているハンガリー人の多くは、日本を知らないか、日本とのコンタクトをもっていない人だろう。そのような視聴者が半年以上にわたって、「ミツコ」を見続けることで、「ミツコ」という一つのイメージが形成される。それが日本人女性の一つの典型だと思いきよようになっても不思議はない。日本人と言えば、「ミツコ」になる。こうして、「ミツコ」が一人歩きする。RTL 局はもう「ミツコ」をパロディ化した番組を放映した。これから、ハンガリーのテレビで、「ミツコ」の出演が多くなるだろう。学園祭などで、子供が真似ることにもなろう。それが昂じれば、日本人の女性にたいして、「ミツコ」と声をかける輩も出てくるだろう。アジア人を見たら、「ニイハオ」と声をかけてくるのと同じだ。現地校に通う日本人師弟にたいして、「ミツコ」と名付けるいじめが起きることも心配されるし、スキンヘッドの日本人への暴力行為が誘引される懸念もある。

### テレビの倫理コード

日本のテレビ局がどんな白痴番組を制作しようが、それは日本社会の問題だ。同じことはハンガリーのテレビ局についても言える。しかし、日本にもハンガリーにも、番組制作の倫理コードがある。個人の名誉の毀損や民族差別を助長する番組は、日本だけでなく、ヨーロッパでも厳しい批判に晒される。たとえば、もしシュタール・ユディットが日本人レポーターではなく、ユダヤ人レポーターあるいはロマ人レポーターとして同じ演技をしたらどうなるかを考えて見れば良い。今のハンガリーでも、一発で放映中止だ。相応の制裁措置も課せられる。ところが、ハンガリーを含めたヨーロッパには、日本人やアジア人なら構わないだろうという安易な考えが潜在している。しかし、ふつうのハンガリー人はこれを分かっているし、ヨーロッパに出ている日本人もこのことに恐ろしく鈍感だ。

文明国の常識として、メディアが具体的な個人や民族を題材にする場合には、その名誉が毀損されないように細心の注意を払う必要がある。それを犯せば名誉毀損で訴えられても仕方がない。メディアの倫理コードはメディアが守るべき社会的義務であり責任である。

TV2 は「ミツコ」がライセンス番組で、購入先のオランダで問題になっていないのに、どうしてハンガリーで問題になるのかと反論する。これは言い訳にならない。この程度の番組すらライセンス番組なのかと驚くが、そもそもオランダの番組はドッキリ番組ではなく、「ビート・たけし」の突っ込みトークショウのようなもので、番組の性格が基本的に異なる。レポーターを醜悪に設定したのは、ハンガリーの創作である。

## 日本人社会の対応

日本大使館や日本人会が、日本人社会への影響を考え、メディアの倫理コードに照らして番組放映に抗議し、その中止を求めたのは当然の措置であろう。もちろん、抗議や制裁措置ですべてが終わるわけではない。これまで目立って発言してこなかった日本人社会が、この番組への抗議を契機に、ハンガリー社会と対話を始め、議論していくことの意味は大きい。また、当地の日本人もまた、テレビ出演という話に乗せられて、内容を考えることなく、安易に出演したことを自戒すべきだろう。個人の責任で発言し出演するならともかく、黙って座っているだけの役柄で、日本人をパロディにする番組に出演するのは、どう考えても恥の上塗りとしか言いようがない。

これを契機に、自らの姿勢を糾したいものだ。